

小菌核腐敗病 Small sclerotial rot (*Botrytis squamosa*)

【見分け方】

本病は秋期の収穫間際に発病が目立つようになる。秋期は土中の軟白部に発病するため、発病に気づくのは収穫時になってからがほとんどである。軟白部表面に淡褐色の斑点を生じ、次第に拡大して病斑を中心に縦に亀裂が入る。時に亀裂部分から内葉が突出する場合もある。病徴が進むと腐敗残渣上に暗褐色～黒色の菌核を多数形成する。出荷調製の皮むきで病斑部を落としても、出荷先で腐敗するケースもある。

近年は春の定植直後の幼株に発病するケースが多い。葉先枯れ症状から始まり、病勢が進むと枯死し、欠株となる。気温の上昇に伴い発生は少なくなる。

【発生生態】

一次伝染源である菌核からの分生子は、栽培全期間を通じて形成される。感染・発病は20以下で、削り込みや土寄せによる保湿・水分過多により感染好適となる。本病の発生量は年次変動が大きい。

抵抗力の弱い生育初期での発病が主となるため、定植前の防除（灌水や浸漬処理：防除基準参照）を徹底し、適期の定植（老化苗防止）を行う。



苗畑での発病



定植後の発病